

高橋虫麻呂の「登筑波山歌」

— 文選詩の「憂」との関連 —

村 山 出

旅と伝説の歌人高橋虫麻呂は、筑波山にかかわる歌も少なからず残している。なかでも「登筑波山歌」は虫麻呂の歌人的性格を考える上で重要な位置にあると考えられ、しばしば論じられて来た。

従来の主な説によると、青木生子氏はこの歌に「孤愁」を読みとられ、犬養孝氏が虫麻呂を「孤愁のひと」と性格づけられて以来、孤愁説に立つてこの歌の理解を深める論が井村哲夫・金井清一・清原和義・原田貞義の諸氏によって進められ、中西進氏が「寂寥の風景が心の憂情とよく調和し」て、憂情が「自然の中に救済されていった」と解されるに至って、この説は極点に達した感がある。

これに対し、万葉歌が秋景に悲愁を表現するに至ってな

いことを前提に、この歌に「孤愁」を読みとることを疑われる高野正美氏は、虫麻呂が個的な状況を通して「神の山」として信仰を集める筑波山に畏敬の念を表したとみる讚美説をとられた。これを受けて佐藤政司氏は、この歌の景物が当時定着していた秋景の美的な表現と同然であるとして、宴席における筑波山讚歌と考えられ、他方内藤明氏は、この歌が国見歌・羈旅歌の発想に立ちながら漢詩文的な文芸的意識の認められる作品で、その主旨は農耕的自然観にもとづく充実した秋景に接して虫麻呂個人の憂情が除かれたところにあるとみられ、筑波山における遊覧の宴で披露されたものと推定された。

内藤氏の説は秋景に対する理解では大きく異なるものの、この歌の主意についての見解は中西氏の説にかなり接近したものになっていると言えるであろう。諸説の驥尾に付し

て、以下に私なりの理解のしかたを述べてみたい。

二

筑波山に登る歌一首并せて短歌

草枕 旅の憂へを 慰もる こともありやと 筑波嶺
に 登りて見れば 尾花散る 師付の田居に 雁がね
も 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に
白波立ちぬ 筑波嶺の よけくを見れば 長き日に
思ひ積み来し 憂へはやみぬ(9一七五七)

反歌

筑波嶺の裾廻の田居に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉手折
らな(9一七五八)

〔原文〕

登筑波山歌一首并短歌

草枕 客之憂乎 名草漏 事毛有哉跡 筑波嶺余
登而見者 尾花落 師付之田井余 鴈泣毛 寒来喧
奴 新治乃 鳥羽能淡海毛 秋風余 白浪立奴 筑
波嶺乃 吉久乎見者 長気余 念積来之 憂者息沼
(9一七五七)

反歌

筑波嶺乃 須蘇廻乃田井余 秋田刈 妹許將遣 黄
葉手折奈(9一七五八)

原文も併せて掲げたが、この歌は本来「高橋連虫麻呂歌集」に収められていたもので、その表記について原田貞義氏は用字法に虫麻呂の特色を認めうることを指摘され、また小島憲之氏は漢籍語を用いた表現に虫麻呂の特色を認められた。この歌には虫麻呂の表記が伝えられていると考えよう。

小稿では特に長歌の表現を中心に見るが、国見の山であり耀歌の山である筑波嶺にかかわるこの長歌が、その基底に国見歌の型をもつという先学諸氏の指摘は重要である。

ただ舒明天皇の国見歌と比較して明らかのように、虫麻呂の歌の表現は、「草枕 旅の憂へを 慰もる こともありや」と個人的な動機で登り、秋景を眺望して、そのよさに「長き日に 思ひ積み来し 憂へはやみぬ」と個人的な心情に収斂している。この歌は官人集団の中で披露されたと思うが、その前に、この歌の発想は個人的と言えるものであり、それがこの歌の特色ともなっている。

特に自分のある種の心情を「憂へ」と把握し、秋景に関連させて「憂へ」の解消を歌に表現したことは特殊であると言わなければなるまい。

この「憂へ」の語を歌に用いた歌人は、ほかに山上憶良がいるだけで、

a……父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み

居て 憂吟ひ……(5八九二)

b 年長く 病みしわたれば 月重ね 憂吟ひ こと

ことは 死ななと思へど……(5八九七)

の二例のように、aは農民の「貧窮」の苦しみにあえぐ姿、bは老いた身が「病苦」にさいなまれる心の表現に用いている。また憶良は「沈痾自哀文」の中に、二例、

a 抱朴子には「人はただその死なむとする日を知らず、故に憂へぬのみ。」

b 古詩には「人生百に満たず、何ぞ千年の憂へを懐かむ」といふぞ。

と引用した漢籍の語として記している。憶良は「千年の憂へ」とまったく同じ意味で「千年の愁苦」も用いているので、「愁」の場合もあげると、

a 一代の權樂、いまだ席前にも尽きねば、千年の愁苦、さらに座後に継ぐ。(5沈痾自哀文) 憶良

b 巧く愁人の重患を遣り、能く恋者の積思を除く。

(17三九七三序) 池主

c 二たび秀句を吟ふに、すでに愁緒を濁く。

(17三九七六序) 家持

d 膝を抱き独り笑み、よく旅の愁を濁く。

(18四一三二序) 池主

などがある。憶良の「憂・愁」の三例はいずれも「死苦」

の嘆きを意味している。池主と家持にあっては家持の重病を契機に家郷思慕にとどまらぬ人間の煩い嘆きを意味していると見られる。これらの例の中で、「旅の愁を濁く」「積思を除く」などの表現が虫麻呂の歌の表現に重なっているのは見逃せないが、残念ながら虫麻呂よりも後のもので、考察の対象からははずさざるをえない。また「愁」は今問題にしている「憂へ」の枠内に理解できると考えられるので、以後は特に触れないことにする。

ここで確認しておきたいのは、第一に「憂へ」の意味するところは、人間の存在にかかわる苦惱(貧窮・病苦・死苦)にともなう心情で、「悲し」という感情にも結びつくが、それだけでは把握しきれない苦悩や嘆きを包含しているということ、第二に今見た例が示すように、「憂へ」の語は歌語としては特殊でも、漢籍においてはそれほど特殊ではないと思われること、である。

『懷風藻』はそれを裏づけているようで、「憂へ」の語は五例見られる。

(1) 詩

a 何ぞ憂へむ夜漏の深きことを。

(五一) 境部王

b 誰か別離の憂を慰めむ。

(五三) 山田三方

c 願はくは転蓬の憂を慰めむ。

(七一) 安倍広庭

(2) 文

d 願はくは大王勤めて徳を修めたまへ。災異憂ふるに足らず。

(一序) 大友皇子

e 昔母の憂に丁り、山寺に寄住す。(一一〇序) 釈道融
文の二例は後に記された場合が考えられるので除くとして、詩の三例は虫麻呂と大体同じ頃の作者のものであるが、この中で虫麻呂の「草枕 旅の憂へを 慰もる こともありやと」によく似た「願はくは転蓬の憂を慰めむ」の詩句をもつ安倍広庭の詩は、虫麻呂の歌の成立になんらかの關係をもつのであろうか。広庭の詩は秋の詩でもあるから、虫麻呂がこの詩に接してヒントを得たという可能性も考えられよう。

蟬息涼風暮 蟬は息む涼風の暮

雁飛明月秋 雁は飛ぶ明月の秋

傾斯浮菊酒 斯れの浮菊の酒を傾け

願慰転蓬憂 願はくは転蓬の憂を慰めむ

(七一) 秋日於長王宅宴新羅客一首

この広庭の詩が披露されたのは長屋王宅の新羅使送別の宴であるが、長屋王が左大臣となって以後の初秋七月の宴とすると、神龜三年(七二六)七月が最もふさわしいようであり、小島憲之氏の指摘に従うべきであろう。⁽¹³⁾一方、虫麻呂の東国關係の歌が作られた時期は明確ではないが、蓋然性の高い時期として、藤原字合が常陸国守として着任し

た養老三(七一九)から、一旦帰京して再び征夷持節大將軍として常陸国に赴いた神龜元年(七二四)までの作とすれば、虫麻呂の歌が広庭の詩よりも先に成立していることになろう。広庭との關係はないものとして考えるならば、虫麻呂は特殊ともいえる表現の可能性をどのようにして開くことができたのかということになるが、それは文選詩から示唆を得ることによってであると推定しなければならぬように思う。

そのことを暗示しているのはほかならぬ広庭の詩の表現である。この詩の秋の景物「蟬・涼風・雁・菊」は『礼記』の「月令」の秋の景物と一致する。この点で文選詩とも共通するところがあるが、「明月」や「転蓬」の語も加えると文選詩の詩語の範囲に収まると見てよいであろう。これは広庭ら詩作者が諸書に学んでいたことは勿論であろうが、詩作の手法がまず文選詩であったからであろう。時と所を隔てた広庭と虫麻呂が類似の語句を用いたのだとすれば、文選詩を共通の根とする、同根異種の作品と見なければならぬであろう。

三

そこで、文選詩の中に「憂」の用例を求めると、詩四五

九首中の六四首に「憂」の語が七一例見られる。そのうち、虫麻呂の歌で問題となる「旅」にかかわる「憂」は一九例、「憂へを慰もる」意味に対応する例は「憂」を「消す・解く・写く」などであるが、用例の多い「憂を忘る」によって代表させ、以後は「忘憂」で一括することになると、「忘憂」は一四例にのぼる。

「旅」にかかわる「憂」の内訳は、「旅」にある者の「憂」が一〇例、「家郷」にある者の「憂」が九例である。

まず「旅」にある者がどういふ状況で、どのような心情を表す語として「憂」あるいは「憂」を含む熟語を用いているのかを確かめておきたい。

(1) 羈旅無終極 羈旅終極無く

憂思壯難任 憂思壯にして任へ難し

(2) 懷往歡絶端 懷び往き歡は端を絶ち
悼來憂成緒 悼み来りて憂は緒を成す
(七哀詩二首 王仲宣、23 哀傷)

(3) 脩身悼憂苦 身を修むるも憂苦を悼み
感念同懷子 同懷の子を感念す
(爲顧彦先贈婦二首 陸士衡、24 贈答)

(4) 憂苦欲何爲 憂苦して何をか為さんと欲る
纏繇胸與臆 纏繇たり胸と臆とに

(5) 曷爲久遊客 曷為れぞ久遊の客
憂念坐自殷 憂念坐に自ら殷なる
(赴洛二首 陸士衡、26 行旅)

(6) 誰令乏古節 誰か古節に乏しくして
胎此越鄉憂 此の郷を越るの憂を胎さしむる
(還至梁城作一首 顔延年、27 行旅)

(7) 傷哉客遊士 傷ましいかな客遊の士
憂思一何深 憂思一へに何ぞ深き
(還都道中作一首 鮑明遠、27 行旅)

(8) 絲竹徒滿坐 糸竹は徒に坐に滿つるも
憂人不解顔 憂人は顔を解かず
(悲哉行 陸士衡、28 樂府)

(9) 同心而離居 心を同じくして離れ居む
憂傷以終老 憂へ傷みて以て老を終へんとす
(樂府八首 東門行 鮑明遠、28 樂府)

(10) 去去莫復道 去で去で復た道ふこと莫けん
沈憂令人老 沈憂は人をして老いしむるのみ
(古詩十九首、29 雜詩)

これらの例の「憂」の意味するところは、(1)果てしない旅にある身の嘆き(悲嘆)、(2)身内と別れて独り旅にでる寂しさ(寂寥)、(3)異郷で志を得ることのできない苦しみ(苦

惱)、(4)官仕えしながら望郷の念を抑えがたい嘆き(悲嘆)、(5)果てしない旅にさすらう身の嘆き(悲嘆)、(6)仕官したために旅にでる結果となった悔い(悔恨)、(7)旅の身の寄るべなき(不安)、(8)旅の身の癒されぬ辛さ(辛苦)、(9)帰郷の望みがない悩み(苦惱)、(10)軍役の旅に積もる辛さや不安(辛苦)などで、このように旅に限定してみても悲嘆をはじめとして寂寥・悔恨・不安・苦惱・辛苦などと、「憂」の内容は多様であることが確かめられる。

ついでながら、家郷における「憂」九例のうち、(1)心事俱已矣 心事俱に已んぬるかな

江上徒離憂 江上徒に憂へに離ふのみ

(新亭渚別范零陵詩一首 謝玄暉、20祖餞)

(2)人誰不勤 人は誰か勤めざらん

無厚我憂 我が憂へを厚くすること無かれ

(贈文叔良一首 王仲宣、23贈答)

の二例は送る友人の心情を表し、(1)が惜別、(2)が懸念を意味する。他の七例は、

(3)憂来思君不敢忘 憂へ来りて君を思ひ敢て忘れず

不覺淚下霑衣裳 覺えずも涙下りて衣裳を霑す

(燕歌行 魏文帝、27樂府)

(4)憂愁不能寐 憂愁して寐ぬる能はず

攬衣起徘徊 衣を攬り起きて徘徊す

(古詩十九首、29雜詩)

(5)感物多所懷 物に感じて懷ふ所多く

沈憂結心曲 沈き憂へは心曲に結ぶ

(雜詩十首 張景陽、29雜詩)

(6)悠悠行邁遠 悠悠として行き邁きて遠く

戚戚憂思深 戚戚として憂思深し

(擬古詩十二首 擬行行重行行 陸士衡、30雜擬)

(7)佇立想萬里 佇立して万里を想へば

沈憂萃我心 沈憂は我が心に萃る (右に同じ)

(8)悲發江南調 悲しみは江南の調べに発せ

憂委子襟詩 憂へは子襟の詩に委す

(擬古二首 擬行行重行行 劉休玄、31雜擬)

(9)結思想伊人 思ひを結びて伊の人を想ひ

沈憂懷明發 沈憂して明発まで懷ふ

(擬古二首 擬明月何皎皎 劉休玄、31雜擬)

の七例における「憂」は、いずれも待つ妻の夫を思慕し待ち佐びる嗟嘆である。

つぎに「忘憂」に関する場合であるが、何によって「憂」を忘れようとするのか、あるいは忘れたというのか、によって分けて見ると、

「人」による場合(六例)

(1)寔消我憂 寔に我が憂ひを消し

(2) 憂急用緩

憂ひは急なるも用て緩うせり

(答盧諶詩一首并書 劉越石、25贈答)

(3) 誰云聖達節

誰か云はん聖は節に達し

知命故不憂

命を知る故に憂へずと

(重贈盧諶詩一首 劉越石、25贈答)

(4) 先民誰不死

先民誰か死せざる

知命亦何憂

命を知れば亦何をか憂へん

(筵篔引 曹子建、27樂府)

(5) 豈曰無感

豈感無しと曰はんや

憂爲子忘

憂ひは子が爲に忘らる

(樂府十七首 短歌行 陸士衡、28樂府)

(6) 絃歌蕩思

絃歌は思ひを蕩すも

誰與消憂

誰と与にか憂ひを消さん

(朔風詩一首 曹子建、29雜詩)

〔酒〕による場合 (二例)

(1) 何以解憂

何を以てか憂を解かん

唯有杜康

唯杜康有るのみ

(短歌行 魏武帝、27樂府)

(2) 汎此忘憂物

此の忘憂の物に汎べ

遠我達世情

我が達世の情を遠くやらん

(雜詩二首 陶淵明、30雜詩)

〔詩〕による場合 (一例)

伊余雖寡慰

伊れ余慰み寡しと雖も

殷憂暫爲輕

殷憂は暫く爲に輕し

(答靈運一首 謝宣遠、25贈答)

〔騎馬〕による場合 (一例)

載馳載驅

載ち馳せ載ち驅り

聊以忘憂

聊か以て憂ひを忘れん

(善哉行 魏文帝、27樂府)

〔樂土〕を見て (一例)

朝入譙郡界

朝に譙郡の界に入れば

曠然消人憂

眩然として人の憂ひ消ゆ

(從軍詩五首 王仲宣、27軍戎)

のほかに、小稿で問題にしている「自然」とのかかわりで

「忘憂」を意味する語の見られる詩が三例ある。

(1) 嘒嘒鳴鴈

嘒嘒として鳴ける鴈

奮翼北遊

翼を奮ひて北に遊ぶ

順時而動

時に順ひて動き

得意忘憂

意を得て憂ひを忘る

(幽憤詩一首 魏・嵇叔夜、23哀傷)

(2) 日暮遊西園

日の暮れに西園に遊びて

冀寫憂思情

憂思の情を写かんと冀へり

曲池揚素波

曲池は素き波を揚げ

列樹敷丹榮

列樹は丹き榮を敷けり

上有特棲鳥

上に特棲る鳥の有りて

懷春向我鳴

春を懷ひて我に向かひて鳴きぬ

褰衽欲從之

衽を褰げて之に従はんと欲るに

路險不得征

路險しくて征くことを得ず

(雜詩一首 後漢・王仲宣、29雜詩)

(3)撫襟悼寂寞

襟を撫でて寂寞を悼み

怳然若有失

怳然として失へること有るが若し

明月入綺窓

明月綺窓に入り

髣髴想蕙質

髣髴として蕙質を想ふ

消憂非萱草

憂へを消すは萱草に非ず

永懷寧夢寐

永く懷ひて寧ろ夢寐にせんとす

(雜體詩三十首 潘黃門〔岳〕述哀 梁・江文通、31雜擬)

これらの例のうち、(2)は「憂思の情を写かんと冀へり」とある。しかし景物の鳥の「春を懷ひて我に向かひて鳴きぬ」の解釈は、『詩経』「召南」の「野有死麋」に「有女懷春 吉士誘之(女有り春を懷ふ 吉士之を誘ふ)」によるべきであるとするれば、連れを慕う春の鳥と解さなければならぬであろうから、ここでは除外して考えざるをえない。だが(1)の「意を得て憂ひを忘る」という表現は、鴈が自然の条理そのままに生きているという自然性を見て、そこに「忘憂」の意義を認めたもので注目したいと思う。このように「憂」の語をてがかりとして文選詩に求めた

かぎりでは、残念ながら、秋景によって「憂」を忘れたと表現する例は見出せないが、では逆に「秋」の詩について検討するとどうであろうか。

四

文選詩のなかに「秋」の詩は六五首あり、おおまかな分け方であるが、このうち景の叙述が乏しい詩一四首は除くと、「憂」を主題とする詩が四〇首と大変多く、小尾郊一氏が秋の詩は憂情の詩といつてよいほどであると指摘された通りである。これに対して、主題が憂情に結びつくとは言いがたい「秋」の詩もあつて、その内容から「憂」の語そのものは用いてないが、その内容から「憂」を「祛く」とか、「憂」を脱却した心境を示す「忘憂」を意味する表現をもつ詩も若干ではあるが、一一例見出される。

「憂」を主題とする詩のなかにも、自然の叙述の態度に注目すべき点が認められる例があるので、いささか触れておきたい。

(1)四運雖鱗次

四運は鱗のごと次びと雖も

理化各有準

理化には各に準かなる有り

獨有清秋日

獨り清秋の日有りて

能使高興盡

能く高興を尽くさしむ

景氣多明遠

景氣は多明遠にして

風物自凄緊

風物は自ら凄緊なり

爽籟警幽律

爽籟は幽しき律を警し

哀壑叩虚牝

哀壑に虚なる牝を叩く

歲寒無早秀

歲寒くして早き秀は無く

浮榮甘夙殞

浮き榮は夙く殞つることに甘んず

(南州桓公九井作一首 晋・殷仲文、22 游覽)

(2) 日夕陰雲起

日の夕陰雲起れり

登城望洪河

城に登りて洪河を望めり

川氣冒山嶺

川氣は山の嶺を冒し

驚湍激巖阿

驚湍は巖の阿に激し

歸鴈映蘭詩

歸鴈は蘭の詩に映じ

游魚動圓波

游魚は円き波を動かす

鳴蟬厲寒音

鳴蟬は寒き音を厲しくし

時菊輝秋華

時菊は秋の華を輝かす

引領望京室

領を引して京室を望めば

南路在伐柯

南の路は伐柯に在り
(河陽縣作二首 晋・潘安仁、26 行旅)

(3) 羈心積秋晨

羈心秋の晨に積れり

晨積展遊眺

晨に積れば遊眺に展ばさんとす

孤客傷逝湍

孤客は逝湍を傷ひ

徒旅苦奔峭

徒旅は奔峭に苦しめり

石淺水潺湲

石淺くして水は潺湲たり

日落山照曜

日落ちんとして山は照曜しぬ

荒林紛沃若

荒林は紛として沃若たり

哀禽相叫嘯

哀禽は相叫びて嘯く

遺物悼遷斥

物に遭ひて遷斥を悼めども

存期得要妙

期を存して要妙を得んとす

(七里瀨一首 宋・謝靈運、26 行旅)

右の(1)は、作者の殷仲文が桓公に従い九井山に登った折に、桓公の臣下に対する慈しみを讃嘆しつつ、我が身を省みて公の厚遇に応えうるかを危惧する心を歌った詩であるが、秋の澄みわたった眺望の中に風物は凄緊な趣を呈して、風の音は物悲しい調べを奏で、草の穂や花も凋落しているさまを描きながら、四季それぞれの趣のなかでも「独り清秋の日有りて 能く高興を尽くさしむ」と秋の興趣の深さを称揚している。(2)は、詩の主題から独立していると感じさせるほどに、登高眺望した秋景の興趣を表現している。(3)の「羈心秋の晨に積れり 晨に積れば遊眺に展ばさんとす」と、秋の朝にひとしお感じられる旅愁を「遊眺」によって晴らそうとする表現は虫麻呂の歌の発想に通ずるところがあるが、作者の謝靈運は、より深奥な道を悟る契機を秋の興趣に見出しているようである。

では「忘憂」の認められる詩はどうであろうか。

(1) 明月澄清景 明月は清景を澄へ

列宿正參差

列宿は正に參差たり

秋蘭被長坂

秋蘭は長坂に被り

朱華冒綠池

朱華は綠池を冒ふ

潛魚躍清波

潛魚清波に躍り

好鳥鳴高枝

好鳥高枝に鳴く

神颺接丹轂

神颺丹轂に接し

輕輦隨風移

輕輦風に隨ひて移る

飄飄放志意

飄飄として志意を放にす

千秋長若斯

千秋長に斯くの若し

(2) 季秋邊朔苦

旅鴈違霜雪

季秋辺朔苦しく

淒淒陽卉腓

淒淒として陽卉腓み

皎皎寒潭絜

皎皎として寒潭絜し

良辰感聖心

良辰は聖心を感じ

雲旗興暮節

雲旗は暮節に興る

鳴葭戾朱宮

鳴葭朱宮に戻り

蘭卮獻時哲

蘭卮時哲に獻ぐ

(公讌)

(3) 哀鴻鳴沙渚

悲援響山椒

哀鴻沙渚に鳴き
悲援山椒に響く

亭亭映江月

亭亭たり江を映す月

瀏瀏出谷廳

瀏瀏たり谷を出づる廳

萋萋氣幕岫

萋萋として氣は岫を幕ひ

泫泫露盈條

泫泫として露は條に盈つ

近矚祛幽蘊

近く矚めて幽蘊を祛き

遠視盪諠囂

遠く視て諠囂を盪ぐ

(4) 沈迷簿領書

回回自昏亂

簿領の書に沈迷し
回回として自ら昏亂す

釋此出西城

此を釈てて西城を出て

登高且遊觀

高きに登りて且か遊觀せんとす

方塘含白水

方塘は白水を含みて

中有覺與鴈

中に覺と鴈と有り

安得肅肅羽

安にか肅肅たる羽を得て

從爾浮波瀾

爾に従ひて波瀾に浮ばん

(5) 金風扇素節

丹霞啓陰期

金風素節を扇ぎ
丹霞陰期を啓けり

騰雲似涌煙

騰雲は煙を涌すに似て

密雨如散絲

密雨は糸を散らすが如し

寒花發黃采

寒花は黃采を發ち

秋草含綠滋

秋草は綠滋を含めり

閑居玩萬物
離羣戀所思

閑かに居て万物を玩ぶも
群を離れては思ふ所を恋へり

(雜詩十首 晋・張景陽、29雜詩)

(6) 秋菊有佳色

秋菊佳色有り

裊露掇其英

露を裊ふて其の英を掇る

汎此忘憂物

此の忘憂の物に汎べ

遠我達世情

我が達世の情を遠くやらん

一觴雖獨進

一觴ごとに独り進むと雖も

杯盡壺自傾

杯尽きて壺も自ら傾く

(雜詩二首 晋・陶淵明、30雜詩)

(7) 翠山方藹藹

翠山方に藹藹として

青浦正沈沈

青浦正に沈沈たり

涼葉照沙嶼

涼葉沙嶼を照らし

秋榮冒水潯

秋榮水潯を冒へり

風散松架險

風散りて松架険しく

雲鬱石道深

雲鬱にして石道深し

靜黙鏡懸野

靜黙して懸き野を鏡

四睇亂會岑

四睇會き岑に乱る

氣清知鷹引

氣清くして鷹の引を知り

露華識猿音

露華くして猿の音を識る

雲裝信解蔽

雲裝信に蔽を解かん

煙駕可辭金

煙駕金を辞す可し

(雜體詩三十首 謝光祿〔莊〕郊遊 梁・江文通、31
雜擬)

「忘憂」の認められる詩に公讎詩三首も含めて考えた。

公讎詩は「憂」と全く関係なさそうであるが、秋景の性格を考へる上で参考となるので、ここには(1)(2)の二例をあげた。公讎詩は君公の設けた宴に参席した臣下が宴を讚美するものであるが、(1)の魏の曹子建の詩における秋の景物は「志意を放しす」、つまり心を解放し楽しませる佳き景として「千秋長に斯くの若し」とことほぎに結びつく。それが宋の頃になると変化が認められ、(2)の謝靈運詩の秋景には「淒淒として陽卉腓み 皎皎として寒潭絜し」と寒々とした秋気のなかに夏草も色変えて萎み、白々とした光のなかに冷たい池水が澄んでいる、と凋落と淒緊の景を描いている。このような秋景の表現が重陽の節に宋公と臣下が和樂する宴をことほぐ意味をもっている。人の心を悲哀にいざなうような秋景が高興を尽くさしめる趣のものとして取り上げられていることでは、先にふれた憂情を主題とする「秋」の詩の表現と同趣である。これは秋景そのものが主題に従属する位置から離れ、興趣の深さが賞美されるに至ったからであろう。すでに触れた安倍広庭らの『懷風藻』の宴詩における秋景の表現もこのような公讎詩に対応するものと考へられるであろう。

この謝靈運の詩に

季秋辺朔苦しく 旅鷹霜雪を違く

淒淒として陽卉腓み 皎皎として寒潭絮し

と叙述された秋景は、虫麻呂の歌における

尾花散る 師付の田居に 雁がねも 寒く来鳴きぬ

新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白波立ちぬ

という秋景の表現を連想させるところがある。

五

公讌という場の制約が緩和されるところに遊覧詩や雑詩が見られる。

(3)の謝惠連の遊覧詩は、「哀鴻」「悲猿」と悲哀をもよおすような色合いをもつ景物を表現するが、この秋景に対し、

近く矚めて幽蘊を祛き 遠く視て諠囂を盪ぐ

と述べる。「幽蘊」は鬱結であり憂情にほかならず、「諠囂」は世のかまびすしき、煩いである。この詩は、秋景によつて憂情・煩いが払拭されたと述べている。これがほかならぬ「忘憂」の表現であろう。

また雑詩の(4)は時代がさかのぼつて後漢の劉公幹の詩であるが、多忙な実務に鬱積した心を晴らそうとする思いを述べたもので、登高遊観して、清らかに光る白水を湛えた

池に遊ぶ鴨と雁を見て、そのなかに自分の身も置きたいと願う。既にみた、鳥が自然の条理のままに生きるというあり方が「忘憂」であろうから、この詩にうかがわれる作者の願ひは「忘憂」への強い希求である。

下級官人であった虫麻呂は教養もあり文才も豊かで、文筆に関係ある職務に従事していた可能性が強く、この詩の表現のように時には「簿領の書に沈迷し 回回として自ら昏乱す」というような経験もしたのではないかと想像される。「選叙令」や「考課令」によると下級官人も「文選」「爾雅」について学ぶことは欠かせなかつたであろうし、木簡に見られる習書に関する東野治之氏の考察によれば、奈良時代における「文選」の受容は下級官人の間にもかなり普及していたようである。まして詩歌の創作を志すほどの者は積極的に「文選」に学んで想を求めたであろうから、虫麻呂も「文選」を読んでいたことは疑いなく、劉公幹のこの詩などに触れていれば、恐らく深く共感を覚えた一首ではなかつたかと推測される。

(5)の張景陽の詩は、世俗を離れ、秋の風物を楽しむ生活「忘憂」の境にあつて満ち足りた心を「閑かに居て万物を遊ぶ」と述べる。

(6)の陶淵明の詩は秋の風物のなかで「忘憂の物」たる酒に陶然として、「達世の情」をさらに放下しようという気持

を歌っている。

(7)の江文通の詩は、秋景の高興に接して、「雲装信に歡を解かん 煙駕金を辞す可し」と官職を辞し隠退したいという気持ちを述べている。世俗の煩いから離れ、仙道を慕っているようである。

このように「秋」の自然にかかわる「忘憂」の詩も、内容的に

- 1 (3)や(4)のように、俗に身を置いて秋景に「憂」を忘れようとし、あるいは忘れたとする
- 2 (5)や(6)のように、俗を離れて、秋の風物を楽しむことに満ち足りたとする
- 3 (7)のように、秋景に接したのを契機に俗を離れ、さらに仙道を求める

などのあることが確かめられるであろう。

小尾郊一氏は、魏晉においては、しばしば秋景が悲哀憂愁の感情を表すために利用され、後世の文学における「悲秋」の觀念がこの頃確立したのではないかと推定され、同時に甚だ僅少であるが、遊樂や歓樂につらなる秋景もあり、秋の景色を客観的に描こうとする叙景詩の流れがあり、それが宋代に入って山水詩となることを指摘される。「忘憂」の詩はその流れのなかに位置づけられるであろう。

そして、『文選』の「秋」の詩が悲哀・憂愁の感情を表現

するものであったと指摘されるほどに「憂」が表現された中でこそ、「忘憂」を求める心も表出されたということであろう。

ここで虫麻呂に戻るが、虫麻呂が「登筑波山歌」を作ったということは、彼が『文選』の「忘憂」詩に接しており、俗にあつて「忘憂」を思う詩に共感するところがあつた、ということを物語っているのではないかと思う。虫麻呂の秋景にかかわる「憂」の表現は、『万葉集』の中では孤立的である。しかし文選詩と相わたると考えることができれば、特殊に見えた表現の契機も理解しやすくなるであろう。

虫麻呂が「忘憂」を歌に表現したことには以下のような意義が認められる。

虫麻呂は自分の心情を「憂」と把握することによって、『文選』の「忘憂」詩に想を得てその心情を解放させる文学的な表現の可能性を開いた。このことは、同時代の憶良が文学の表現を

一章の歌を作り、もちて二毛の嘆を撥ふ。

(5八〇四序)

謹みて三首の鄙歌をもちて、五臓の鬱結を写かむと欲ふ。

(5八六八序)

などの営為であると述べた詩学に等しい実践を、歌の表現でおこなったのにほかならないということであり、後に家

持も、

橙橘初めて咲き、霍公鳥翔り嚶く。この時候に对ひ、
あに志を暢べざらめや。よりにて、三首の短歌を作り、
もちて鬱結の緒を散らさまくのみ。(17三九一一序)

春日遅々にして、鶴鷓正に啼く。悽惻の意、歌にあら
ずしては撥ひかたきのみ。よりにて、この歌を作り、も
ちて締緒を展ぶ。(19四二九二左注)

と文学意識を示し、池主との詩歌の交流に、

二たび秀句を吟ふに、すでに愁緒を蠲く。

膝を抱き独り笑み、よく旅愁を蠲く。(17三九七六序) 家持

と述べるが、虫麻呂がその先鞭をつけていたということであ
る。(18四一三二序) 池主

虫麻呂と藤原宇合の関係は、大久保正・金井清一両氏が
推定されるように、宇合が虫麻呂の文学的才能を認めて作
歌の力を育成し、作歌の場を支えた可能性は強いと思われ
虫麻呂も歌を披露する場を充分に考慮しつつ期待に応えよ
うと努めたであろう。虫麻呂の資質を見出した宇合もまた
詩人であつて、詩集『藤原宇合集』二卷(一卷とも)があ
つたと伝えられ、『懐風藻』に詩六首、『経国集』に賦一篇
『万葉集』に短歌六首を残しているが、懐風藻詩の「悲不

遇」の中に、

南冠勞楚奏 南冠楚奏に勞き

北節倦胡塵 北節胡塵に倦みぬ

と述べ、「奉西海道節度使之作」では、

往歳東山役 往歳は東山の役

今年西海行 今年は西海の行

行人一生裏 行人一生の裏

幾度倦邊兵 幾度か辺兵に倦まむ

と旅の憂情を吐露している。原田氏が指摘されるように、
こうした宇合の文学的な表現に共感した虫麻呂は、呼応す
るように自身の心情を表現したと考えてよいであろう。

虫麻呂の「登筑波山歌」における「憂」の語は、一首の
性格を理解する上で重要な意義をもっていることを改めて
確認したいと思う。

なお、文中に引用した詩の訓みは、懐風藻詩は小島憲之
氏の『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(日本古典文学大
系)、文選詩は花房英樹氏の『文選』(全釈漢文大系)によ
つた。

注1 青木生子氏「抒情詩人としての虫麻呂」、『日本抒情詩
論』昭和三十一年。

2 犬養孝氏「虫麻呂の心―孤愁のひと―」、『万葉の風土

続「昭和四七年。なかで、八木毅氏の「高橋虫麻呂における伝説歌の位置」(『パンセ』一五号、昭和二六年一月)に「孤愁」の指摘があることを紹介されている。

3 井村哲夫氏「若い虫麻呂像」、『憶良と虫麻呂』昭和四八年。

4 金井清一氏「疎外者の文学」、『万葉詩史の論』昭和五九年。

5 清原和義氏「高橋虫麻呂の筑波山考」、『武庫川国文』第一四・一五号、昭和五四年三月。

6 原田貞義氏「高橋虫麻呂——『登筑波山歌』をめぐって——」、『論集万葉集』昭和六二年。

7 中西 進氏「旅に棲む 高橋虫麻呂論』昭和六〇年。

8 高野正美氏「高橋虫麻呂」、『国語と国文学』昭和五七年十一月。

9 佐藤政司氏「『登筑波山歌』考」、『美夫君志』三三五号、昭和六二年七月。

10 内藤 明氏「旅愁と豊饒——高橋虫麻呂の『筑波山に登る歌』をめぐって——」、関東学園女子短大『短大論叢』七八号、昭和六二年七月。

11 原田貞義氏「万葉集の私家集序説」、『岩手大学教育学部研究年報』昭和四四年一月。

12 小島憲之氏「上代日本文学与中国文学 中」第八章の(三)「伝説歌の表現」、昭和三九年。

13 小島憲之氏「懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹」(日本古

典文学大系)昭和三九年。

14 小尾郊一氏「中国文学に現れた自然と自然観』昭和三七年。

15 東野治之氏「正倉院文書と木簡の研究』昭和五二年。

16 大久保正氏「高橋虫麻呂論——その作歌の場——」、『万葉集の諸相』昭和五五年。

17 金井清一氏「高橋虫麻呂と藤原字合」・「高橋虫麻呂論序説」、『万葉詩史の論』昭和五九年。

付記 小稿は、高岡市で開催された平成三年度上代文学会大会において、五月十九日に報告したものである。当日ご質問下さった諸氏に感謝申し上げます。とくに中西進・原田貞義両氏からありがたいご助言とご質問をいただいたが、小稿ではご助言を充分に反映させることができなかったことをお詫び申し上げます。